

全面撤退ありえぬ

江頭チッソ社長言明

補償は積み上げ方式で



記者会見する江頭チッソ社長

水俣市を訪れている江頭チッソ社長は、二十九日も同市内の一部と露北郡内の水俣病被害者の家庭を回り謝罪した。このあと午後四時からチッソの陣内クラブで記者会見を行ない「チッソ水俣工場全面撤退というわけでも流れているようにだが、これは誤りであり絶対にあり得ない。被害者への補償は二十四年に結ばれた会社と互助会の間の契約を基礎に積み上げ方式でいきたい」と語った。

同社長の発言要旨次の通り。
なくなれた方の家庭や患者さんを見舞って、もし自分がその人たちの立ち場だったらと相すまぬ気持ちでいっぱいだ。ただこうした中にも施設に収容されている患者の中には少しずつ快方に向かっている人もあり、また社会復帰した人もあると聞いてうれしく思った。特に悲惨だったのは胎児性の患者で、こうした若い人たちは一番お世話していかなくてはならない。被害者の補償については三十四年に会社と互助会の間で結ばれた契約を基礎に、積み上げてゆく方式をとりたい。ただ、さきの契約の中の「水俣病が工場排水に起因することが決定しても新たな補償の要求はいつさい行なわない」という条文にはこだわらない。

い。まず互助会との自主交渉を考えているが、もし互助会が厚生大臣にあつせんを要請するようならそれでも結構だ。

水俣工場の全面撤退というわけでも流れているようにだが、全くのなほかたことではない。水俣誤りだ。水俣には肥料工場があるがチッソ硝子の地という歴史的な誤り、最近新しい施設が完成したば問題もあるのでは無理をしても工

場を存置し、出来れば発展させていきたい。だが地元の協力体制にはいまでも多少の不安を感じている。これからの化学企業は公害を防ぎながら国際競争に打ち勝ていかねばならない。それには①排水や排煙の限度はとれただけを研究して早くこれを決め②同時に公害の事前予防の方法をみつけないとが当面の大きな課題である。そのためには地元の研究機関とも密接な協力体制を作らなければならない。

なお江頭社長は、二十九日までに水俣病被害者へのおわび回りを終わり、三十日と十月一日の両日は地元の金融機関や各種団体に向いさつ回りをし、一日夜熊本をたつて東京へ向かう。